

昭和の美術

鑑賞ポケットガイド

—絵と題名—



あなたは絵をみるとき、

絵と題名のどちらを先にみますか。

題名は何か描いてあるかを説明するとともに

絵を深く読むためのきっかけにもなります。

絵と題名の関係

ものがたり

家族のように暮らしていた

馬を埋葬する場面が描かれています。

馬の好きなこの画家は、死んでしまった馬を友と呼び、

淋しげな表情や仕草で、

永遠の別れを悲しむ人々の姿を表現しました。

題名にはいろいろなおもいがこめられています。

この題名は作者と馬との関係や

ここで起こっている物語を想像させてくれます。

あなたが《友よさらば》という物語をつくとしたら

どんなお話になりますか？

えびはらきのすけ とも
海老原喜之助 《友よさらば》

1951年 161.8×130.8cm



〔画家の言葉〕

私の作品はここ数年間、「人間」をあつかったものが多いのですが、
どうして人間を描きたがるのか解らんけど、人間を描くほうが、風景や動物より好きです。
し、人間の次には馬も好きです。
先日、九州で坂本繁二郎先生と馬の対談をしたとき、私の絵は、馬が人間と居て、人間との関係になっていると指摘されたのでした……。

海老原喜之助『「人間」を描く』『美術手帖』9月号 1954年より

てがかり

画家は線を描いては消し、描いては消して、

これかと思った線だけを残しました。

画面は赤黒くモヤモヤとしていて

はじめはよそよそしい感じもしますが

題名を手がかりに絵をみていくと

なんだか少しずつ人や建物がみえてきました。

でも描かれているのは

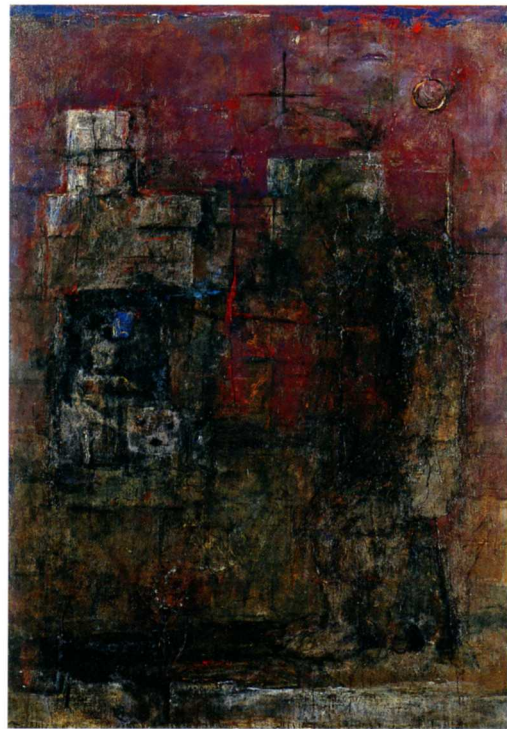
単なる風景ではないようです。

描くこと、みること、現実をつかみとること。

この題名は、描いたものをそのまま言葉に表わした

だけのようですが

画家が追求したことも考えさせてくれます。



[画家の言葉]

人間のいない風景など興味が無い。(…)風景が人間のように感じられた。触覚的な風景だ。人間臭い生活的な風景のなかで生きてきた、又生きつづけるであろう風景だ。

麻生三郎『赤い空 2』『美術手帖』7月号 1956年より

きっかけ

なにかをもとにして絵を描くと決めたら

あなたはどのように描きますか。

この絵の題名について、

画家は右のように語っています。

ここでははっきりした鬼の姿は描かれていません。

鬼は絵を描くきっかけとなり、

画家の想像の中で何度もこわされ

生まれかわった鬼が描かれています。

[画家の言葉]

題名の「鬼」ということは、この絵のテーマではなく、むしろモチーフであります。それはこの絵の出来る原因となっておりますが、その結果については予測していません。まず順序として最初に「鬼」があつて、そこから形と色がうまれ、方向が作りだされます。——それから鬼は煮つめられ、乾燥され、悪魔祓いをして抜殻になった骸が並べられ、そして下部の方は裏返ししておきました。だから鬼はもういないかもしれません。

齋藤義重「鬼」『美術手帖』7月号 1957年より



